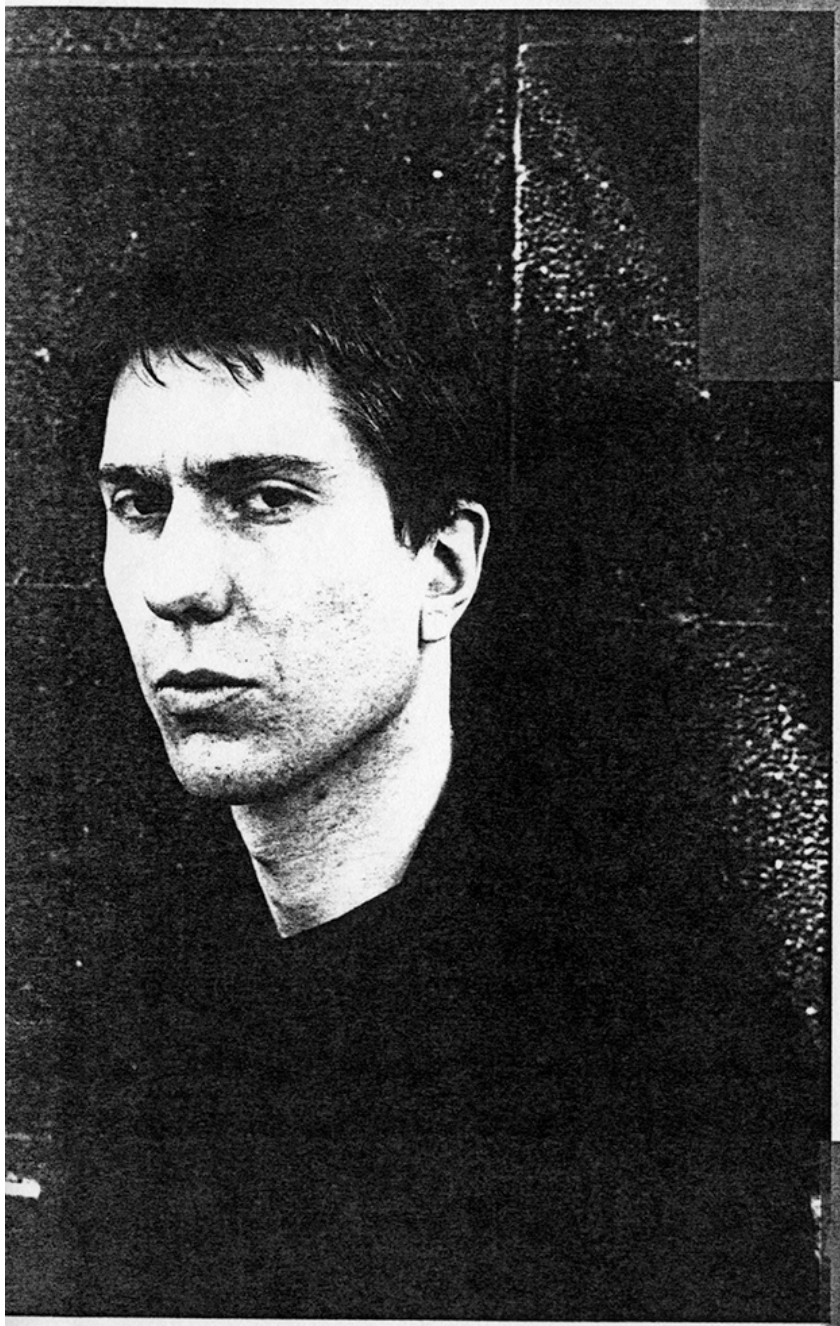
INTERVIEW

CHRISTOPHE CHARLES/ARTIST

クリストフ・シャルル　新しい環境音楽を創造するアーチスト。芸術にみる日本人の感性は理解できないからこそ面白い、という来日6年のフランス人。

Name　クリストフ　シャルル
Occupation　マルチ　メディア　アーチスト
Date of birth　1964年1月20日
Citizenship　フランス
Career　マルセイユ生まれ。パリの大学で建築、日本語などを学んだ後、87年来日。現在、筑波大学大学院在学中（デザイン専攻）。環境に反応する音楽に興味を持ち、シンセサイザーやサンプラーを駆使したサウンド　インスタレーションなどを制作。92年10月には日本人アーチスト21人をつれてベルリン他ヨーロッパ4都市のツアーを行なった。
What made you come to Japan?　日本人の実験音楽やパフォーマンスに現われている、感覚の特異性を理解したかった。
Some message　日本の現代アートを欧米に紹介する活動を、手伝ってくれませんか。英語のできる若い女性を歓迎。



80歳の白塗りのパフォーマーがいる。水の入ったワイングラスの縁を指でなぞって音を鳴らすミュージシャンがいる。黒ずくめの衣装でパーカッションを投げ付けるギタリストがいる。机の上を裸で動き、自分の体をゆっくりと動く彫刻のように見せるパフォーマーがいる。すべて日本人。わたしたち一般日本人がほとんど知らない現代アーチストたち。その人たちの小さなステージを根気よく見て回り、たぶん全部知っていて、そのうちの何人かを外国のフェスティバルへ連れていってしまった人がいる。

クリストフ　シャルル。29歳のフランス人。

「総勢21人、1カ月のツアーですからね。ものすごい貧乏ツアーでした」

去年の秋のことだ。だれかが招聘してくれたわけではない　クリストフ自身が彼らのビデオテープを作り、ひとりひとりの経歴書を書き、その期間に行なわれるヨーロッパのフェスティバルの主催者全員に送ったのだ。

たぶんすごいエネルギーがいったに違いない。ヨーロッパのフェスティバルには会場と音響装置を用意させ、製作費を出させ、一人数万円のギャラももらう交渉をし、一方日本ではアサヒ、トヨタ　ライオンなどの各社を回り、窓口の担当者のだれ一人見たことも聞いたこともまして理解など到底できないアーチストに、パンフや渡航費用のための金を出してくれと頼んで回ったのだから。

ところがそれを言っても、この　ホ〜と背の高いフランス人は、ノホ〜と長い顔をノホ〜とさせたまま、うまい日本語に大して力も入れない。いかにも〝フランスおたく〟っぽい表情が少し熱を帯びるのは、アーチストの話をする時だけだ。

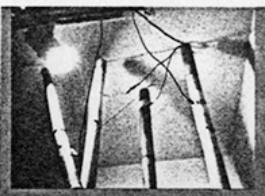
「28歳と25歳の女性で〝オペラ〟というグループがいます。ラテン語で中世のメロディーを歌うかと思えば、ビートのきいたシンセの音が入ったり、アフリカや中国や日本の民謡が混じったりします。なぜこういう時にこの音が入るのか、僕にもわからないんです（笑）」

初めて聞く音楽だったと言う。

「その僕の感想が、ヨーロッパ人も同じかどうか知りたくて、で、ツアーで連れていったんです」

結果はCDを出さないかという話がきて、テレビ出演もどうかという話もあり、この5月パリ　ユネスコホールでの公演が決まった。

「やっぱり新しかったのです　東京という情報の多い環境を背景にして、たくさんの情報を日本人独特の細かさできちんと組み合わせている。その組み合わせ方が西洋人には不思議だし、テンションとか時間の使い方が、西洋人にはつかめないものなんです。日本人特有の遥遠とか、能とか歌舞伎から来たものを感じますが、突然止まったりするでしょ。日本人だって意味わからないと思いますけど（笑）」

裁判官だったおじいさんは日本の法律と経済と政治についての著書がある。現代音楽の作曲家ジョン　ケージの研究者であるお父さんは日本の美学についての本を書いたそうだ。彼自身は10代の時4年間柔道場に通い　12歳の時初めて日本女性の着物姿を見、14歳の時日本人建築家の展覧会を見た。6年前日本にやって来て、現在は筑波大学大学院のデザイン専攻の学生。卒論のテーマは「現代日本の映像芸術」。

「だって誰も書いてくれないんです。日本の最新文化をわかっているフランス人も日本人もいないみたいだから（笑）」（文／知念万里子）